

大学における今後の情報リテラシー教育

梶浦 文夫

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2006年10月4日 受理)

1. はじめに

2003年度から全国の高等学校で新教科「情報」がスタートし、全ての高校生が卒業までに1年間の情報リテラシー教育を履修するようになった^{1) 2) 3) 4) 5)}。そして2006年度にはこのような情報リテラシー教育を受けた高校生が大学に入学してきた。その結果、大学で行ってきた情報リテラシー教育もその内容を変えていく必要がある。

従来大学で行っていた情報リテラシー教育は、パソコン、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどの操作が中心であったと思われる。2003年度からは、これらの内容を高校で行うようになったため、大学での情報教育は、それらをふまえた上で、より進んだ内容にする必要がある。では、どのような内容を扱うべきか、学ぶべきかを検討しなければならない。

そのためには、まず今年度の新生がどの程度の情報リテラシーを身につけているのかを調査する必要がある。次に、その調査結果に基づいて、大学での情報リテラシー教育のあるべき姿を考えることとする。

本研究では、2005年度と2006年度の新生に対して行った情報リテラシーに関するアンケート調査結果について検討するとともに、著者が担当している2006年度生対象の情報リテラシー教科での試みについて報告する。

2. アンケート調査

アンケート調査は2005年度と2006年度の両年、玉野総合医療専門学校作業療法学科1年生に対して行った。記名式である。2005年度入学生は高校で教科情報が始まっていない最後の世代であ

り、2006年度入学生は新教科情報が始まった最初の世代である。しかし、正確に言えば2006年度入学生の中にも

表1 アンケート内容

質 問 内 容	
質問1	パソコンの操作に慣れていますか
質問2	ブラウザを使ってインターネットで情報検索をしていますか
質問3	ワープロを使って文書を作成したことがありますか
質問4	表計算ソフトを使ったことがありますか
質問5	PowerPointなどを使って発表資料を作ったことがありますか
質問6	Accessなどデータベースソフトを使ったことがありますか
質問7	自分のブログやWebサイトを運営していますか

2006年卒業でない学生が少数混じっているため、2006年度生全員が教科情報を履修しているわけではない。アンケートの実施時期は、両年度ともに1年次前期の第一回目の授業時である。対象者の人数は偶然どちらも39名であった。

アンケートの質問内容を表1に示す。質問1はパソコンの操作に関するもの、質問2から質問5までが教科情報で扱うであろうと思われるソフトに関するものである。質問6および質問7については教科情報の時間内では扱っていないと思われるが、どの程度の学生が個人的に使っているのかを調べるためのものである。また、回答の選択肢は、質問6だけが2択式、その他は全て4択式である。

3. アンケート調査結果

(1) パソコンの操作に慣れているか

表2 質問1への回答と人数

質問1 パソコンの操作に慣れていますか	2005年度		2006年度	
	2005年度	2006年度	2005年度	2006年度
4 達人である!	0	1	0	1
3 普通に使える	18	15	18	15
2 あまり慣れていない	16	23	16	23
1 使ったことがない	5	0	5	0

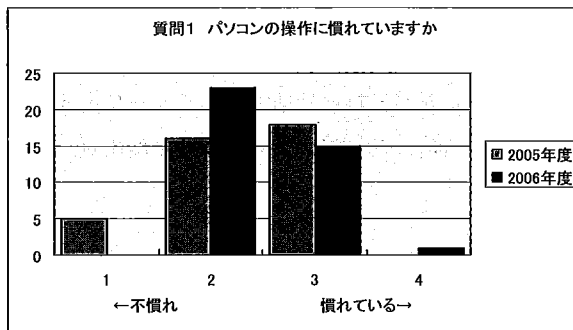


図1 アンケート質問1に対する回答の分布

ていることである。

しかし、中間の「普通に使える」「あまり慣れていない」については、2005年度と2006年度の結果が予想と逆になっている。これらの結果から簡単に断定できないが、家庭へのパソコンの普及、教科情報以外の科目でのパソコンの使用などによって、2005年度と2006年度の差が縮小しているのかもしれない。

(2) インターネットで情報検索をしているか

質問2はインターネットでの情報検索の程度について尋ねている。回答の選択肢と人数

質問1は、「パソコンの操作に慣れていますか」である。回答の選択肢と選択した人数を表2に、両年度の回答の分布の様子を図1に示す。図1のグラフでは、左へ行くほどパソコンの操作に不慣れであることを表わしており、右へ行くほど慣れていることを表わしている。表2、図1を見ると、一番の違いは前年度に比べて2006年度入学の学生に「使ったことがない」という回答がないことである。さらに、「達人である!」という自信満々の回答を前年度0名に対して2006年度入学生1名が選択し

表3 質問2への回答と人数

質問2 インターネットで情報検索をしていますか		
	2005年度	2006年度
4 いつもしている	10	8
3 ときどきしている	16	27
2 少なくとも1回はしたことがある	6	4
1 全くしたことがない	7	0

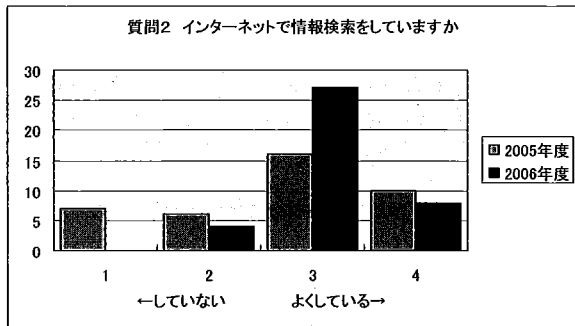


図2 質問2に対する回答の分布

情報検索の頻度が上がっていることが分かる。

(3) ワープロソフトの使用の程度

表4 質問3への回答と人数

質問3 ワープロを使って文書を作成したことがあるか		
	2005年度	2006年度
何度もある	15	9
何回かある	9	17
少なくとも1回はある	7	12
全くしたことがない	8	1

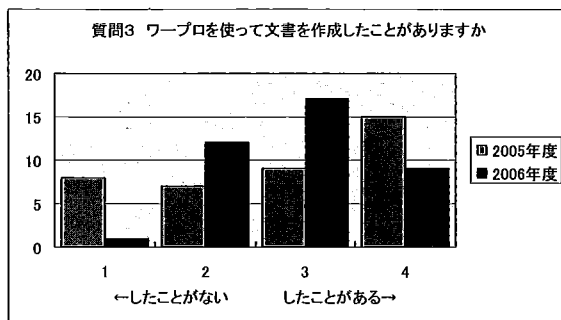


図3 質問3に対する回答の分布

を表3に、兩年度の回答の分布を図2に示す。図2のグラフでは、左に行くほどインターネットでの情報検索の頻度が少なく、右に行くほど頻度が多いことを表わしている。この質問2への回答でも、前年度7名いた未経験者が2006年度入学生には1名もいないという特徴があり、教科情報によって確実に底上げがなされていることが分かる。この点は、質問1への回答と同じで、全員が必修科目として履修した成果が表れている。

また図2のグラフを見ると、全体的にインターネットでの情

質問3は「ワープロソフトを使って文書を作成したことがあるか」である。回答の選択肢と人数を表4に、兩年度の回答の分布を図3に示す。図3のグラフでは、左に行くほどワープロソフトの使用経験が少なく、右に行くほど使用経験が多いことを表わしている。

この質問3に対する回答の分布の様子を図3のグラフで見ると、全体として、2005年度より2006年度の分布が右（使用経験が多い方向）によっていることが分かる。表4を見ると、2006年度入学生の中に「(ワープロソフ

トを使って文書作成を) 全くしたことがない」を選んだ学生が1名いる。その理由として、学科内には高校卒業と同時にこの学科入学していない者もいるため、2006年度入学生が全員高校で教科情報を履修しているわけではないことが考えられる。

(4) 表計算ソフトの使用経験

質問4は「表計算ソフトを使ったことがありますか」である。回答の選択肢と人数を表5に、両年度の回答の分布を図4に示す。図4のグラフでは、左に行くほど表計算ソフトの使用経験が少なく、右に行くほど使用経験が多いことを表わしている。図4のグラフで両年度の回答の分布を比較すると、2006年度入学生の方が全体的に使用経験が多いことが分かる。

(5) プレゼンの資料作成経験

質問5は「PowerPointなどのソフトで発表の資料を作ったことがあるか」である。回答の選択肢と人数を表6に、両年度の回答の分布を図5に示す。図5のグラフでは、左に行くほど発表資料作成の経験が少なく、右に行くほど経験が多いことを表わしている。図5のグラフで両年度の回答の分布を比較すると、2006年度入学生の方が全体的に作成経験が多いことが分かる。ただ、質問4までの回答と比べて、質問5の回答では、2006年度入学生でも「(発表資料作成の経験が) 1回もない」

表5 質問4への回答と人数

質問4 表計算ソフトを使ったことがありますか	2005年度 2006年度	
	4 よく使っている	2
3 何回もある	10	18
2 少なくとも1回はある	11	16
1 全く使ったことがない	16	4

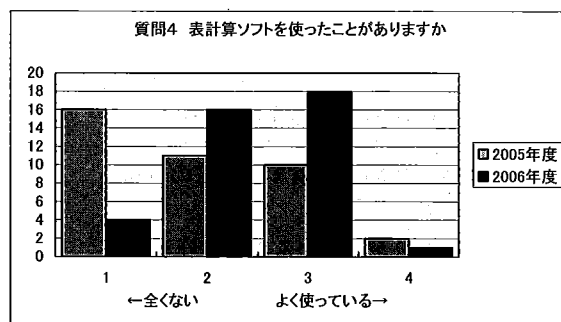


図4 質問4に対する回答の分布

表6 質問5への回答と人数

質問5 PowerPointなどで発表資料を作ったことがあるか	2005年度 2006年度	
	4 3回以上ある	3
3 2回ある	5	7
2 1回ある	10	17
1 1回もない	21	8

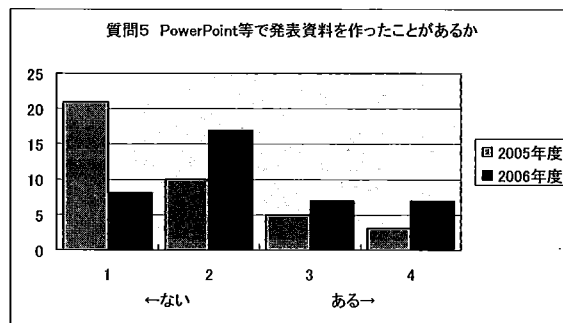


図5 質問5に対する回答の分布

を8名が選択しており、教科情報は履修しても、高校によってはパソコンによる発表資料の作成をさせていないところがあるようである。

(6) その他の質問

その他の質問として、経験者は非常に少ないと思われたが、「データベースソフトの経験があるか」および「自分で Web サイトやブログを運営しているか」について尋ね

表7 質問6への回答と人数

質問6 Access などデータベースソフトを使ったことがあるか	2005年度 2006年度	
	2 使ったことがある	2
1 使ったことがない	37	36

表8 質問7への回答と人数

質問7 自分のブログや Web サイトを運営していますか	2005年度 2006年度	
	4 両方運営している/ていた	0
3 Web サイトを運営している/ていた	0	1
2 ブログを運営している/ていた	2	1
1 どちらもしていない/たことがない	37	34

た。これらの内容は高校の教科情報の授業ではまず扱わないであろうと想像していたが、アンケート結果も予想したとおりであった。表7に質問6への回答の分布、表8に質問7への回答の分布を示す。どちらも、ほとんどの学生が経験していないことが見て取れる。ただ、質問7の Web サイトやブログサイト運営については、2005年度よりも2006年度の方が明らかに増加していることがわかる。

4. 今後の情報リテラシー教育

2005年度と2006年度の質問1から質問5までの回答を比較すると、教科情報新設によって起こるであろうと予想していたほどの劇的な違いは見られなかった。理由として極端を嫌い中庸を好む日本人のアンケート回答の傾向も考えられる。また、現在では多くの家庭にパソコンが普及したため高校の授業以外でもいろいろなソフトに親しんでいることなども考えられる。

しかし、実際に専門学校や大学で2006年度生を対象にした情報リテラシー教育を行ってみると、前年度との差は明らかであった。それは、前年度の授業の際に苦労したパソコンの操作、日本語入力、Windowsの基本操作などさまざまな点で、2006年度入学生には全然できないという学生がほとんどいなかったことである。この点はアンケート調査結果でも明らかとなったように、「底上げ」がなされたと考えられる。操作に熟達した学生はこれまでもいたが、「全くできない学生がいなくなった」点が非常に顕著である。

以上のことをもとに大学、専門学校における今後の情報リテラシー教育を考えると、従来のパソコンやソフトの操作など「使い方の学習」に費やしていた時間を、情報収集、分析、表現など「情報そのものを扱う」ために活用していかなければならない。

著者は、2006年度前期の情報リテラシー教育科目の授業を開始するにあたって、まず、(1)文章を理解し表現する、(2)統計の基礎を学びつつ基本的なデータ分析を行うという2点を目標にした。しかし、実際に授業を始めてみると、(1)の文章理解と表現で早くも行き詰ってしまった。前年度まではワープロソフトの操作を中心に行っていたため、それほど目立たなかったが、内容を中心に指導するようにした途端、ほとんどの学生たちが分かりやすく表現できないことが明らかとなった。そして、その原因を調べていくと、一番の問題点は学生たちが話の要点をつかめていないことだった。結果として初年度前期を終わった段階では問題点ばかりが明らかとなっただけで、それにどのように対処すべきなのかという点まで踏み込むことができなかった。

5. まとめ

2006年度以降に大学、専門学校に入学してくる学生たちは、高校で全員が情報リテラシー教育を受けている。そのような学生を受け入れる大学では、それまでのソフトの操作を中心にした情報リテラシーをより高い内容に変えていかなければならない。

本研究では、教科情報を履修していない最後の学生である2005年度入学生と履修している最初の学生である2006年度入学生に対してアンケート調査を行った。その結果、高校での教科情報によって基本的な情報リテラシー能力の底上げがなされていることが分かった。また、大学や専門学校での情報教育で情報の収集・分析・表現などについて学ぶことの難しさも明らかとなった。今後は第一の課題である「話の要点をつかむ」能力を高めるにはどうすればよいかを考えていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省, “高等学校学習指導要領解説 総則編”, 東山書房, 1999.
- 2) 文部科学省, “高等学校学習指導要領解説 情報編”, 東山書房, 1999.
- 3) 文部科学省, “中学校学習指導要領解説 技術・家庭編”, 東京書籍, 1999.
- 4) 小川吉造・今井久仁・松井孝二, “高校の情報教育—メディアリテラシーを学ぶ”, 黎明書房, 2002.
- 5) 宮地・梶浦他, “新しい情報教育の理論と実践の方法”, 現代教育社, 2004.

Information Literacy Education in College after the 2006 Fiscal Year

Fumio, KAJIURA

Dept. of Comparative Animal Science,

College of Life Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 4, 2006)

After 2003 fiscal year all of Japanese high school students learn the subject “information”. So after 2006 fiscal year information literacy education in college must be changed and be more advanced. The author carried out the questionnaire about the information literacy capability for new students in 2005 fiscal year and in 2006 fiscal year. The following thing became clear from the two questionnaire results. It is that all of new students in 2006 can operate the personal computer and basic software nevertheless some of new students in 2006 can not.

This paper reports the results of above-mentioned questionnaire and discusses on the contents of information literacy education in college.